

命を支えるもの

—塩と鉄の神学—

第1回 海と塩—地の塩として清める者

「あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味
が取りもどされようか。」

— マタイによる福音書 5章 13節（口語訳）

私たちの命は、見えないところで絶え間なく血液や酸素などが循環することで保たれています。

そして、その中に微量の塩分が含まれていますが、この塩こそが、命を腐敗させることなく清く保ち、循環させる小さな守り手です。

イエスが語られた「あなたがたは、地の塩である」という言葉には、このような人体や自然の摂理と密接に関連する霊的な意味が込められています。

海から始まる命の循環

すべての水は、大地を流れて海へと注がれ、やがて蒸発して空にのぼり、雨となって再び大地に降り注ぎます。

このような「水の循環」は、地球上の命を支える基本的なしくみです。

しかし、この水が単に清いだけでは、このような循環を保つことはできません。

海水に含まれる塩は、水の浸透圧を一定に保ち、さまざまな生命が生きられる環境を整え

る役割を果たしています。

そして、塩が体内の水分バランスを保つように、海も地球全体の水の循環において不可欠な役割を担っているのです。

【塩の効果】

- ・ 塩は水に混ざることによって、微生物の増殖を防ぎ、腐敗を抑える
- ・ 河川から運ばれる有機物は、海水との塩分濃度の差によって凝集・沈殿が促される
- ・ 塩分濃度が適切であってこそ、水は生命を支える力を保つ

つまり、「塩」は水の秩序を整え、循環を維持する自然界の浄化装置のような存在なのです。

イエスが語った「地の塩」とは？

このような自然の摂理と重ねてイエスの言葉を読むと、「地の塩である」とは、単なる比喩ではなく、信仰者は世界の命の循環を支える者として、天から召命されているという意味があることが分かります。

そして、塩は決して目立つ存在ではありません。むしろ、その存在が意識されないほど、他のものを引き立てるという特性を持っています。

- ・ 水の中に溶けて見えなくなっても働いている
- ・ 食物に混ぜてもちょうどよい味わいを与える
- ・ 多すぎても害となり、少なすぎても効果がない

信仰者もまた、社会の中で腐敗を止め、真理を保ち、命の流れを整える存在として、「見

えないところでの清さと力強さ」が求められています。

古代世界において、塩は単なる調味料ではありませんでした。ローマ帝国では兵士への報酬として塩が支給されており、「給与 (salary)」という言葉の語源は、ラテン語で塩を意味する「sal」にさかのぼります。

塩は、命を保つのみならず、社会を動かす貴重な資源でもあったのです。

イエスが「あなたがたは地の塩である」と語られたとき、聴衆の耳には、命を守る力と同時に、社会にとって欠かすことのできない価値ある存在としての意味が響いていたはずで
す。

地の塩 = この世界を清め、つなぎ直す者

水が流れ、塩がそれを整えるように、私たちもまた、世の流れの中で、人と人、人と神の間をつなぎ直す「霊的な塩」となるべき存在です。

- ・ 社会の中で対話と関係を保つ者
- ・ 真理を失わず静かに清め続ける者
- ・ 腐敗の中で妥協せず、なお穏やかに働く者

塩の働きは、見えなくても欠かすことができません。信仰もまた、派手さよりも「水を巡らせ、命を保ち、静かに清める」という本質に目を向けるべきものです。

イエスが言われた「地の塩であれ」という命令は、命の循環を保つ目に見えない使命を担う者への召命なのです。

第2回 塩の契約と祈り

「あなたの素祭の供え物は、すべて塩をもって味をつけなければならない。あなたの素祭に、あなたの神の契約の塩を欠いてはならない。」

—レビ記 2 章 13 節（口語訳）

塩—それは旧約聖書において、ただの調味料や保存剤ではなく、神と人との関係を保証する"契約の象徴"とされてきました。

「あなたの素祭の供え物は、すべて塩をもって味をつけなければならない」。それは、塩が不変性・清め・保存性を象徴し、神との永続的な絆を表すものだったからです。

では、現代に生きる私たちにとって、「塩の契約」はどのような意味を持つのでしょうか？

そして、それは祈りや信仰のあり方とどのように関係しているのでしょうか？

塩の契約とは何か？

旧約時代、イスラエルの民が捧げる供え物（穀物のささげ物）には、必ず塩を添えることが命じられていました。

「塩は腐敗を防ぎ、捧げ物を"変わらぬもの"として神の前に差し出す印である」

つまり、塩は「誠実と持続性の象徴」として、神との契約を表していたのです。

- 塩の契約 = 変わらぬ関係
- 神の愛は変わらず、私たちの献げる心もまた変質してはならない
- 時間が経っても、熱が加えられても、塩は"塩であり続ける"

それゆえに、塩は永続的な神の誓いの象徴として尊ばれたのです。

信仰と祈りにおける「塩気」

新約の時代、イエスは「あなたがたは地の塩である」と言われました。

これは社会に対する働きかけだけでなく、信仰そのものが"塩気を保っているか"を問う言葉でもあります。では、塩気を失った信仰とはどのようなものなのでしょうか？

塩気を失った状態の例

- 形式だけの祈り（心のこもっていない供え物）
- 世と妥協し、本質を見失った信仰生活
- 見せかけの熱心さはあるが、清める力を失っている信仰
- 日々の生活の中で神との契約を意識しなくなっている状態

こうした状態は、まさに「塩がその味を失った」信仰であり、人を清めるどころか、自らも腐敗に飲み込まれる危険をはらんでいます。

祈りに塩を添えるということ

祈りは神への捧げ物です。その祈りが塩気を失わないためには、誠実・継続・清さ・変わらぬ献身が不可欠です。

たとえば――

- ・ 感情に左右されず、日々祈り続けること（継続）
- ・ 自己中心的ではなく、神の御心を問う姿勢（清さ）
- ・ 自分の利益ではなく、神との関係そのものを大切にする心（契約）

これらはまさに「塩を添えた祈り」であり、神の前にふさわしい供え物としてささげられ

る祈りです。

私たちは"塩の契約"を生きる者

旧約には、祭儀の塩以外にも「塩の契約」の用例があります。

歴代誌下 13 章 5 節には、「あなたがたはイスラエルの神、主が塩の契約をもってイスラエルの国をながくダビデとその子孫に賜った」とあります（口語訳）。

塩の契約は、礼拝の場だけでなく、神が定められた統治の秩序そのものにも結びついていたのです。

このように、旧約の祭司たちは「塩の契約」によって神に仕えていました（民数記 18:19）。その系譜にある私たちもまた、日々の歩みと祈りに塩を添える者として召されています。

- ・ 日常の中で誠実であること
- ・ 清さを選び取ること
- ・ 神との絆を見失わないこと

これが「塩の契約に生きる」ということではないでしょうか。

第3回 鉄と血

「肉の命は血にあるからである。あなたがたの魂のために祭壇の上で、あがないをするため、わたしはこれをあなたがたに与えた。血は命であるゆえに、あがなうことができるからである。」

—レビ記 17 章 11 節（口語訳）

人の命は血にあり——これは古代から現代に至るまで、人々が直感し、科学的にも明らか

にしてきた真理です。

しかし、その血液が命を保つために不可欠な「鍵」があることをご存じでしょうか？

それが「鉄」です。

鉄は、赤血球中のヘモグロビンの中心に存在し、酸素を全身へと運ぶ働きの一助となっ
ています。

この"生命を巡らせる鉄"を通して、私たちは、神が命に与えた秩序と律法の存在に気づく
ことができます。

血液に欠かせない鉄のはたらき

私たちが何気なく呼吸している酸素は、肺で吸収されたあと、赤血球の中にある「ヘモグ
ロビン」によって体中に運ばれます。

このヘモグロビンの中心に存在する鉄（ヘム鉄）が、酸素を一時的に受け取り、体中へと
運び届ける役割を果たしています。

- ・ 鉄は酸素と結びつくことで一時的に酸素を保持
- ・ 血流に乗って体内を巡り各細胞に酸素を届ける
- ・ 酸素が放出されたあと再び肺へと戻ってくる

この鉄による酸素の運搬こそが、人の命の燃料を循環させるしくみなのです。

鉄がなければ命は巡らない

では、鉄が不足すると体はどうなるのでしょうか？

- ・ 疲れやすくなる

- ・ 息切れがする
- ・ 思考力・集中力が低下する
- ・ 免疫力が落ちる

これはまさに、命の巡りが滞っている状態です。

つまり鉄は、「血を通して命を巡らせる、神の創造の律法」として私たちの体に刻まれているのです。

信仰の世界にも、同じことが言えるのではないのでしょうか。神のみ言に従って行動する力が失われると、心は疲れやすくなり、祈りは息切れし、判断力が鈍くなります。

霊的な鉄不足は、行動の停滞となって現れます。逆に言えば、日々み言を受け取り、祈りを積み重ねることは、霊的な鉄分を補給し続けることにほかなりません。

神の律法と「鉄の規律」

聖書の中で「鉄」は、しばしば強さ・確かさ・揺るがない支配の象徴として登場します。

「彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。」

—黙示録2:27（口語訳）

この「鉄のつえ」は、支配や裁きの象徴であると同時に、神の義と秩序が揺るがないことの象徴でもあります。

鉄は、血の中では命を正しく運ぶための"ガイド"として働き、聖書では、民を正しく導き、罪を正すための"杖"として描かれています。

命が混乱することなく秩序の中で保たれるために必要なものが鉄なのです。

鉄は「厳しさ」ではなく「命の守り手」

時には、「律法」や「規律」という言葉に堅苦しさや抑圧を感じることもあるかもしれませんが。

しかし、鉄がなければ血が酸素を運べないように、秩序なき自由は命を保つことができません。

- ・ 血管というルールがあるから血液は体を巡る
- ・ 鉄という媒体があるから酸素は正しく届けられる
- ・ 神の律法があるから命は乱れずに守られる

「鉄」はただ硬く冷たいだけでなく、命の仕組みを守るための柔軟で繊細な役割を果たしているのです。

信仰における鉄のような在り方

信仰者もまた、鉄のように命を巡らせ、秩序を保つ媒介としての役割を担っています。

- ・ 愛を言葉に乗せて運ぶ人
- ・ 平和を乱さずに導く人
- ・ 見えないところで命の循環を支える人

信仰とは、「熱心である」ことよりも、命を整え、他者を生かす循環の役割を果たすことかもしれません。

まとめ：鉄は命に働きかける神の道具

「血の中に命がある」—その命は鉄によって巡っています。

鉄は、律するための杖であると同時に、命を支える導きの軸でもあります。

神が造られたこの体は、命を保つための法則（律法）に従って動いており、その中で鉄は、命を律し、守る神の"目に見えない杖"として働いているのです。

第4回 鉄の杖とキリストの権威

「彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。」

—黙示録 2:27（口語訳）

聖書にたびたび登場する「鉄の杖（iron rod）」。

この表現は一見、厳しさや裁き、あるいは強権的な支配を連想させるかもしれません。

しかし、その背景には、命を導き、守るための揺るぎない秩序と正義があるのです。

鉄は、前回までに見たとおり、血液の中で酸素を運び、命の流れを律する金属でもあります。

この鉄が「杖」として描かれるとき、それは単なる支配の象徴ではなく、命と社会を正しく導く"神の秩序の象徴"として読み取ることができます。

「鉄の杖」は何を象徴するのか？

「鉄の杖」は旧約聖書の詩篇と新約聖書の黙示録に登場します。

「おまえは鉄のつえをもって彼らを打ち破り、陶工の作る器物のように彼らを打ち砕くであろう。」—詩篇 2 篇 9 節（口語訳）

「女は男の子を産んだが、彼は鉄のつえをもってすべての国民を治めるべき者である。」—黙示録 12 章 5 節（口語訳）

これらの言葉は王（キリスト）の支配を象徴しています。

その支配は、ただ"強い"だけではなく、混乱と腐敗を断ち切り、命を整える秩序の力でもあります。

また、聖書に出てくる「杖」は、導く（牧者の杖）、守る（敵を追い払う）、支える（歩行を助ける）、正す（迷った者を戻す）といった働きを意味しています。

ですから、「鉄の杖」は、暴力的な抑圧を意味するのではなく、杖としての役割を揺るがぬ神の義をもって果たす道具であり、命を支える規律としての裁きと導きを象徴します。

人の体に見る「鉄の支配」

人の体でも、鉄は酸素の運搬、エネルギーの産生、代謝の律し手として働いています。

鉄が不足すれば生命は滞り、機能は鈍りますし、反対に鉄が過剰でも毒になり、体を傷つけます。

ですから、鉄の働きには厳密な"律"が必要です。

キリストの支配もまたそれと同じように、「命を損なうことのない最も的確で正義に満ちた統治」といえます。

キリストの鉄の杖 = 愛と義の交差点

イエス・キリストの支配は、福音書を見れば明らかなように、暴力ではなく、癒しと真理によって導かれる支配です。

- ・ 偽善には厳しく、悔い改めには憐れみ深い
- ・ 人を圧迫する律法ではなく命を活かす律法
- ・ 迷った者を正しながらも倒れた者を見捨てない

彼が「鉄の杖をもって治める」とは、真理と愛が完全に一致した支配のことです。

それは、人の心を砕き、魂を治め、人生を整える力を持っています。

私たちにとって「鉄の杖」とは？

私たちは「支配されること」に敏感で、時に拒否反応を示す傾向にあります。

しかし、本当は、正しく導かれることへの渇きや安心感を求めているのではないでしょうか？

- ・ 誤った情報に振り回される時代
- ・ 境界のない自由に疲れた人々
- ・ 内面の秩序が失われ孤立する心

そんな時代にあって、キリストの「鉄の杖」は、人を罰する道具ではなく、命を正しく支配する秩序への招きなのです。

「塩」と「鉄」の関係

塩は命の腐敗を防ぎ、鉄は命の流れを整えます。どちらも命を守るための静かな力です。

塩が"地を清める者"であるなら、鉄の杖は"命を正す者"の象徴です。

信仰者は、塩のように祈りを捧げ、キリストは、鉄のように真理をもって治めます。

鉄の杖は、壊すためではなく、立て直すためのものですから、再創造の杖であり、真理に基づく支配は命を生きし、正しく導きます。

キリストはその「鉄の杖」をもって、私たちの内なる混乱を整え、社会の秩序を回復し、何よりも、命を本来の姿へと立て直そうとしておられるのです。

黙示録 19 章 15 節には、再び来られるキリストについてこう記されています。

「その口からは、諸国民を打つために、鋭いつるぎが出ていた。彼は鉄のつえをもつて彼らを治め」（口語訳）

これは裁きの恐怖を語っているわけではありません。再臨のキリストが、塩のように清め、鉄のように整えることで、地上の秩序を神の御心に沿って立て直す——そのヴィジョンをヨハネは見たのです。

第 5 回 塩と鉄の交差点

「あなたがたは地の塩である。」（マタイ 5:13）

「彼は鉄のつえをもって彼らを治めるであろう。」（黙示録 2:27）

塩と鉄——どちらも一見、質素で目立たない物質です。しかし、その本質に目を向ければ、命の土台を支える静かな力であることが見えてきます。

本シリーズでは、塩が「清めと保存」の象徴、鉄が「秩序と導き」の象徴であることを見てきました。

最終回では、それらがどのように交差し、私たち信仰者にどのような使命を与えているのかを探ります。

塩—命を腐敗から守る「静かな力」

塩は、目立つことなく働きます。水の中、肉の中、祈りの中、関係性の中——それは腐敗を防ぎ、秩序を保ち、命の循環を守る力です。

信仰者が「地の塩」であるとは、この世に浸透しながら、内側から清さを保つ存在であるということです。

派手な活動ではなく、本質を守る力としての塩は、見えないところで効き続ける「命の防腐剤」なのです。

鉄—命を正しく巡らせる「秩序の芯」

鉄は赤血球の中心にあり、酸素を運びます。また聖書では、「鉄の杖」としてキリストの治める力、揺るがぬ正義の象徴として描かれます。

神の律法は、「命を奪う規則」ではなく命を整える道筋であり、鉄のように強く、しかし目的は壊すためではなく守るための堅さを持ちます。

信仰者もまた、真理を曲げずに支える"鉄の芯"を内に持つ者であるべきなのです。

塩と鉄が交差するとき—守りと導きの統合

塩と鉄は、別々のように見えて、命を支える二本柱です。イエス・キリストはこれら両方をご自身のうちに完全に備えておられます。

罪人を赦す塩のような憐れみと、真理から逸れる者を正す鉄のような厳しさ、そのバランスこそが命を生かすための神の力なのです。

信仰者は、単に「優しい人」「堅い人」ではなく、塩のような愛と、鉄のような真理の両方を携える存在へと招かれています。

塩のように祈りつつ → 世の中に溶け込み、腐敗をとどめる

鉄のように立ちつつ → 真理から目をそらさず、倒れない

これは簡単ではありません。だからこそ、祈り、み言に根ざし、主のうちにとどまり続けることが大切です。

まとめ：命を守る者として、今ここに生きる

命は、塩によって腐敗を防ぎ、鉄によって巡ります。信仰も、愛によって柔らかくなり、真理によって支えられるものです。

今、世界には混乱があります。関係の腐敗、秩序の崩壊、命の軽視。だからこそ、「塩と鉄を携えた信仰者」が必要です。

あなたの中に、「味を失わない塩気」と「折れない鉄の芯」はあるでしょうか？ この世の中で、命を支える静かな力として歩んでいきましょう。